「移民と国境を越えた民族運動」

南真木人
（みなみ　まきと）
国立民族学博物館

発展途上国において送金に代表される移民のもつ経済的効果は、統計的数値に表れるかどうかはともかく、もはや無視できないほど大きく、国家が積極的に労働移民を送り出す制度を整える国が少なくない。だが、その文化的（意識、表象）ないし政治的・社会的な影響は、必ずしも可視化あるいは定量化できないこともあり把握や評価が難しい。異文化の中でマイノリティとして生活する経験は、自己（アイデンティティ）あるいは自文化（エスニシティ）を問い直す契機となりえるし、それらを相対化して見るコスモポリタン的な感性が醸成される土壌をもつ。また、いち早く「近代的なるもの」を身体知として獲得する移民は、移住先ないし帰還後の本国においてその行為者や牽引者にもなりえよう。

本報告では、移民が「民族」を単位としてどのような活動に取り組んでいるのか、「民族」あるいはその「文化」はどのように活用・流用されているのかを紹介し、国境を越えた民族運動を移民の文化的・政治的な効果として位置づけることを目的とする。対象とするのは、日本に暮らす「ネパール人労働移民」と、インドの西ベンガル州に暮らす「ネパール系インド人」、ブータンから難民としてネパールに帰還（1990-94 年）し、現在も難民キャンプに暮らす「ネパール系ブータン人」である。もっとも、ネパールは国勢調査（2001 年）の分類に従うだけでも、101 に上るカーストと民族に分かれる多民族国家であり、「ネパール人/ネパール系」という範疇はあくまで「 」つきだ。ここでは、そのなかでもとくにマガールという人びとに注目したい。

上記 3 地点のマガール人移民は、それぞれ超過滞在者、インド国籍取得者、難民というように、その法的立場が大きく異なるとともに、移住の時期や規模も違う。また、それぞれ異なる 2 国間の国境を背景として、そのボーダーの意味することも違っている。だが、3 者に共通するのは「民族」への強い求心力であり、それはある意味で本国の民族運動を先取りしている。つまり、グローバリゼーションに付随した人口移動は、「民族」意識や宗教の覚醒という、一見すると文化の普遍化と相反するような局面を生み出している。だがそれは、平等、人権、民主主義といったグローバルな文化を希求する帰結であり、きわめて同時代的な政治的運動でもあるのである。ここでは、ボーダーをめぐる構造化された諸制度ではなく、それに対峙する人びとの文化的・政治的な行為と意識に焦点をあて、トランスボーダーの人類学の可能性をさぐる一助としたい。